

声に出して読みたい日本語(一)

弁天娘女男白波 白波五人男』

河竹黙阿弥

知らざあ言いつて聞きかせやしよう。浜はまの真砂まさごと五右衛門ごえもんが、歌うたに残のこせし盗人ぬすつとの、種たねは尽つきねえ七里しちりが浜がはま、その白波しらなみの夜働よばたらき、以前いぜんをいやあ江ノ島えしまで、年季勤ねんきづとめちこの児がヶ淵ふち。百味講ひやくみでちらす時銭まきせんを、当あてに小皿こざらの一文子いちもんこ、百ひやくが二百にひやくと賽銭さいせんの、くすね銭ぜにせえだんだんに、悪事あくじはのぼる上かみの宮みや、岩本院いわもといんで講中こうじゆうの、枕探まくらさがしも度重たびかさなり、お手長講てながこうの札付ふだつきに、とう／＼島とうしまを追おいだされ、それから若衆わかしゆうの美人局つつもたせ、こ、や彼処かしこの寺島てらじまで、小耳こみみに聞きいた音羽屋おとわやの、似ぬ声色にこわいろで小ゆすりかたり、名なさえ由縁ゆかりの弁天小僧菊之助べんてんこぞうきくのすけたア、おれがことだ

『がまの油』

てまえ持もちいだしたるは、四六しろうくのがまだ。四六しろうく、五六ごろうくはどこでわかる。前足まえあしの指ゆびが四本よんほん、あと足の指あしゆびが六本ろつぽん、これを名なづけて四六しろうくのがま。このがまの棲すめるところは、これよりはる／＼か北きたにあたる、筑波山つくばさんのふもとにて、おんばこというつゆ草くきを食くらう。このがまのとれるのは、五月ごがつに八月はちがつに十月じゆうがつ、これを名なづけて五八十ごはつそは四六しろうくのがまだ、お立ちたあひ。このがまの油あぶらをとるには、四方ほうに鏡かがみを立て、下したに金網かなあみをしき、そのなかにかまを追おいこむ。がまは、おのれのすがたが鏡かがみにうつるのをみておのれとおどろき、たら／＼り、たらりと油あぶら汗あせをながす。これを下したの金網かなあみにてすきとり、柳やなぎの小枝こえだをもつて、三七二十一さんしちにしゆういち日にちのあいだ、とろ／＼り、とろりと煮につめたるがこのがまの油あぶらだ。

余白 .. 上下左右20ミリ フォント .. HG正楷書体—PRO

ワードアート .. 28ポイント タイトル .. 18ポイント 本文 .. 14ポイント

本文の行間 .. 固定値30ポイント